

# 小学校における学級づくりに関する一考察

－優れた教員の指導方法に共通項はあるのか？－

小野 領一

Ryoichi Ono

奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

## 1. はじめに

今日の大きな教育的課題として、若手教員の急激な増加により、学校の教育力の低下を招いていることが危惧されている。

すでに岡本ら（2007）は、いわゆる「団塊の世代」の教員の大量退職に伴って、兵庫県内の公立小・中・特別支援学校（神戸市立を除く）の教員として採用され1年に満たない者の大幅な増加が予想され、若い教員の増加によって、学校の職員構成の若返りと新たな活力の導入が期待される一方で、指導経験の浅い若い教員の増加に伴う学校の総体的な指導力の低下が懸念される、と指摘してきた。

さらに、文部科学省（2015）によると、かつては、教員に採用された後、学校現場における実践の中で、経験豊富な先輩教員から経験の少ない若手教員へと知識・技能が伝承されることで資質能力の向上が図られてきたという側面が強かったが、近年の教員の大量退職、大量採用の影響により、必ずしもかつてのような先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承がうまく図られていない状況にあると指摘されている。

これらのことから、優れた教員の知識・技能の共通点を見つけ出し、言語化して、教師力の向上につなげていくことが必要だと考えられる。その中で、本研究は学校の教育力の低下といった課題克服のための一助になるのではと考えた。

## 2. 研究方法

### 2.1. 「優れた教員」

そもそも優れた教師とは一体どういう教師のことを指すのだろうか。中央教育審議会（2005）によると、優れた教師の条件には様々な要素があるが、大きく集約すると次の以下の3つの要素が重要であるとされている。

### ①教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などである。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

### ②教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。力量とは、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

### ③総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる一人の人間として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。しかし、教師がこのような資質を兼ね備えているかどうかを客観的に判断することも非常に難しい。

## 2.2. 調査対象の教員の選考にあたって

優れた教員としてあげられる、「教職に対する強い情熱」、「総合的な人間力」の資質を、客観的に判断することは非常に難しい。そこで、本稿では、客観的に資質を兼ね備えているかを比較的判断し易い、「教育の専門家としての確かな力量」があるかといったことを軸に検討を試みたい。

野中（2010）は、学級経営の両輪として考えられるのが、「学級づくり」と「授業づくり」であると述べている。河村（2012）も、日本の学級集団は、機能体の面をもつ学級集団と共同体の面をもつ生活集団の、二つの側面が統合された集団であり、児童生徒の人間関係や規律のある集団の状態が損なわれる

と、共同体としての学級集団は不安定になり、そのマイナスの影響は学習指導と生徒指導の両面に及ぶ、と述べている。さらに、赤坂（2013）も、成功している集団には良好な関係性があり、学級づくりを進めることで学力を上げることも可能になる、と述べている。つまり、学級経営とは、「学級づくり」と「授業づくり」を同一のものとして扱うのではなく、それぞれを別の要素として考え、伸ばしていく必要がある。本研究では「学級づくり」を論の軸として話を進めていく。赤坂（2017）はそのことに関して、力量のある教員は通常の教科指導の中で、自分との関係や子ども同士の関係を育てたり、学級集団がうまく機能するようなしつけを行なっていると述べている。つまり、「学級づくり」は、授業や授業外で子どもたちの人間関係調整能力を育てて、チームづくりをしていくためのマネジメントだと考えられるのだ。それらを踏まえ、講座、雑誌、著書で自身の実践を発信している教師を「教育の専門家としての確かな力量」があると仮定して、本調査を進めていくこととした。

### 2. 3. 調査の枠組みと仮説

様々な教師の教室に参加していく中で、各教師の指導技術が学級の変容に大きく関わっていたことがわかった。河村（2010）によると、学級経営とは、教師が学級集団のもつ学習集団と生活集団の2つの側面を統合し、児童生徒が、学校教育のカリキュラムを通して獲得される教育課題と、人間としての発達上の課題である発達課題を、統合的に達成できるように計画・運営することである、とされている。これらのことを踏まえると、学級づくりにはマネジメント能力が必要だと考えられ、そこからピーター・ドラッカーのマネージャーに必要な5つの要素と共通する部分があると感じるようになった。ドラッカー（2001）は、マネージャーに必要な5つの基本的能力として、次の5つの要素が重要だと述べている。①目標を設定する、②組織化する（仕事の分類と分担）、③チーム作りと動機付け、④評価する（評価基準を定める）、⑤人を育成する。ここから、「学級づくり」に定評のある教員には、これらの要素を踏まえたマネジメント能力が高いといった共通項が見出されるのではないか、といった仮説が立つ。

### 2. 4. 調査方法

上述したマネージャーに必要な5つの基本的能力を学校現場に置き換え、①目標を設定する、②ルールを設定する、③動機付け、④評価する⑤主体性を持たせる、といった5つの観点から、共通項が見出されるか、参与観察とインタビュー調査をおこなう。尚、指導事項の分類指標として、上述した項目を

以下の通り、具体的に設定し、指標とした。

#### ①目標の設定

3月に向けて、教師と子どもとで具体的なゴール像を描けているか。

#### ②ルールづくり

学級のルール（当番活動、生活規律、授業規律など）が明確に敷かれているか。

#### ③動機付け

子どもたちのポジティブな行為への喚起付けを行なっているか

#### ④評価する

学級のゴールに即し、望ましい行為、または望ましくない行為に関して、個々に応じたフィードバックを行なっているか。

#### ⑤人の育成

子どもに主体性を持たせる場面を設けているか。子どもたちに手抜きをさせていないか。なお、本調査では主体性を引き出すための指導の基準として、青木（2011）の論を採用した。青木（2011）によると、ビブ・ラタネは、個人が受ける社会的インパクトと示した数式を表した $I = f(SIN)$ から3つのポイントがあると述べている。それは、①自分にとってそれがどれほど重要なのか、②自分に関係があるのか、③かわりになる人がいるのか、の3つである。本稿ではそれら3つのうち、いずれかの意図を組んでいると考えられる指導を人の育成として分類した。

これらの指標から、日本各地で活躍されている教師の1日の様子を参与観察し、それに加え各教師の聞き取りをもとに、共通項が見出されるのかを分析していく。

## 3. 調査結果

中堅、ベテランで指導力量があると考えられた5名の小学校教師について、参与観察とインタビュー調査が出来た。以下、それぞれの教師に即して、学級経営および指導に関して観察記録の概要を示す。

### 3. 1. 事例A（観察日 2017年5月26日）

50歳代 男性 奈良県小学校教諭 4年生担任

小学校教員として30年弱の経験がある。2001年に大学院を修了する。群馬県のある教師の学級に参観に行き、育った学級を目の当たりにしたことから、教師に必要な「哲学」論の研究を本格化させた。若手教師育成にも定評がある。

#### ・1日の授業の流れ

まず、大きく気持ちのいい元気なあいさつで1日が始まる。あいさつの後、国語の暗唱。4年生とは思えないほど、たくさんの教材を暗唱していた。一方で、声が小さかったり、手を抜いている子が多い場合、何度かやり直しをさせていた。算数では、最

初の10分間、10マス計算や算数プリントを用いて基礎学力の補充。その後、『学び合い』で授業が進んでいく。相当数の問題を子どもたちに取り組ませていた。

そして、体育、特別活動と授業が進んでいく。特別活動では、子どもたち自身で企画、運営をさせ、活動後、教師が主となり、子どもたちに反省点を踏まえ、次の活動に向けて、どうすればいいのかを考えさせていた。

#### ・観察・聞き取りのまとめ

A氏は、子どもたちに何かをさせる時、必ず語りを用いて行為の意味や意義、価値付けをおこなっていた。

さらに、手抜きを防ぐために全員参加を促す指導技術を多く用いている。例えば、全員立たせて、全員に意見を述べさせる。また、A氏の教室にも学級目標が掲示されており、その目標を軸にどんな行為がいいのかをA氏が示したり、子供たちに考えさせていた。

A氏は、何か問題があれば子どもたちにまず考えさせる。その後、A氏がどうすればよかったのかを伝え、語り等を用いて価値付けを行い、子どもたちのレベルを引き上げていくといった教育的活動が多かった。

### 3.2. 事例B（観察日 2017年6月7日）

50歳代 男性 岡山県小学校教諭 6年生担任

小学校だけでなく、中学校でも教鞭を執っていた。教員として30年弱の経験があるベテラン教員である。現在、人権教育、特別支援教育をベースとした学級経営に取り組んでいる。子どもたち一人一人を伸ばすため、多様な学びのあり方について研究を深めている。

#### ・1日の授業の流れ

朝の時間に、前日の振り返りノートを読める。そのノートの中でいくつかの内容をピックアップし、B氏が価値付けをする。

授業は社会科が『学び合い』、その他の授業が一斉授業だった。一斉授業であっても、教師の一方的な説明は少なく、子どもたちに考えさせる時間が非常に多かった。また、対話の時間が多く設けられていた。

授業外でも、子どもたちに選択する機会を設けて、子どもたち自身にどうすればいいかを自主的に考えさせる機会を多く設けていた。

終わりの会に、子どもたちに振り返りノートを書かせ、提出させていた。

#### ・観察・聞き取りのまとめ

B氏の教室には学級目標が掲示され、子どもたちもその目標を意識しながら行動していた。B氏は子

どもたちに積極的な価値付けとして、語り等はほとんどなかった。しかし一方で、振り返りノートの中身や授業中での発言や態度などに価値付けや評価は行っていた。また、授業の流れ、1日の流れなどのシステムやルールが明確に敷かれており、教師が声かけをせずとも、子どもたちは自主的に動いていた。

教師主体で子どもたちを引っ張っていくことが本当にいいのか。一体何が子どもたちにとって、本当の幸せになるのかを常に自問自答をすることに、B氏は自身の教育の価値を置いているということだった。

### 3.3. 事例C（観察日 2017年6月29日）

30歳代 女性 大阪府小学校教諭 6年生担任

小学校教員として10年弱の経験を持っている中堅教員である。教師力を向上させる研究団体の役員を務めており、若手教員の育成に携わっている。

現在は国語科の研究を深めながら、言葉を大切にす学級づくりについての研究を進めている。

#### ・1日の授業の流れ

大きな声で、気持ちのいいあいさつから1日が始まる。まず、前日の振り返りノートからいくつかの内容をピックアップし、C氏が価値付けをする。

全ての授業が『学び合い』と対話と一斉指導がバランスよく組み込まれた授業だった。

算数では問題演習が終わった子どもは自由に立ち歩き、悩んでいる友だちに教えにいつていた。その後、一斉授業を行い、本時の学習に関する問題演習を子どもたちに取り組ませ、再び立ち歩きを許可し、悩んでいる友だちに教えにいつていた。社会は『学び合い』、体育も対話重視で進んでいた。6時間目、上越教育大学の赤坂先生が提唱する「クラス会議」をおこない、子どもたち自身で学級を自治している姿が見られた。

#### ・観察・聞き取りのまとめ

4年間受け持った学年だということもあり、ルールやシステムがすでに内在化されていたので、随分観察しづらかった。とにかく、子どもたち同士の対話が非常に多く、子どもたちの中のヒエラルキーも非常に見えにくくなっていた。学級ではみんながキラキラできるようにといったことを大切に教育活動が行われていた。そこを軸に、振り返りノートや授業中の発言や態度などに評価や価値付けをおこなっていた。

C氏は子どもたち主体で学級運営することは大切だが、教師が教え込むところは教え込まないと子ども達は大きく成長出来ないと考えているとのこと。

### 3. 4. 事例D（観察日 2017年7月18日）

50歳代 男性 北海道小学校教諭 5年生担任

小学校教員として30年弱の経験を持つベテラン教員である。教師力を向上させる団体の事務局長を務め、教師教育に携わっており、当該地域の教育に大きく貢献したとのことで、表彰もされている。学習者主体の教室づくりについての研究を深めている。

#### ・1日の授業の流れ

非常にシステマチックに子ども達が動いていた。D氏の授業も対話と『学び合い』ベースで進められていた。まず、朝の会に今日1日の目当てを決めさせていた。そして、授業は算数、国語、社会と進んでいくが、教師の一斉指導の割合が非常に少なく、子どもたち主体で授業が進んでいくが、ルールは細かく定められていた。時間を守れず、ごまかそうとした子には厳しく指導をしていた。しかし一方で、発達に課題を有する子どもには指導の深追いをしていなかった。最後にハッピーレターを書く。

#### ・観察・聞き取りのまとめ

D氏の教室では、子どもたちの対話量が圧倒的に多かった。授業中だけでなく、子どもたちが円になって、じっくり対話をするサークルトークの時間を設けたりしている、さらに子どもたち同士を繋げるために、友だちのいいところを書いて渡す、ハッピーレターといった実践も行っていた。

また、子どもたちに行為の価値付けをおこなうために絵本を用いたり、短冊に一言コメントにしていた。学級目標も掲示されており、子どもたちも学級目標を常に意識しながら日々を過ごしており、それ

を軸にD氏が行為の価値付けや評価をしていた。

### 3. 5. 事例E（観察日 2017年10月11日）

30歳代 男性 大阪府小学校教諭 5年生担任

小学校教員として15年弱の経験を持つ中堅教員である。日本各地のセミナーで講師を務めており、教師教育に携わっている。ありとあらゆる人が幸せになるための教育について、研究を進めている。

#### ・1日の授業の流れ

まず、大きく気持ちのいい元気なあいさつで1日が始まる。E氏の授業も一斉授業、『学び合い』、そして対話ベースで進んでいき、さらに、子どもたちに学びの選択もさせていた。学びの選択とは、①個人で考える。②個人で考えて、集団で考え、個人で考える。③集団で考えて、個人で考える、といった3つの学びのスタイルを選択させることだ。これは、一斉指導や『学び合い』でインプットした後に、その時間で学んだことをアウトプットする時間をD氏は設けており、その際、アウトプットをする方法を子どもたちに選択させていたのです。

全ての授業がこのサイクルで展開されており、かつ、子どもたち自身で考える時間も多く設けられていた。なお、手抜きをしている子どもには厳しく指導する場面も見受けられた。

#### ・観察・聞き取りのまとめ

E氏はみんながハッピーになるといったことを軸に教育活動を展開されていた。そして、価値付けや意義付けをする時、この教育観を基にした語りを入れていた。

表1 各教師のマネージャーに必要な5つの基本的能力から考えられる教育実践

	①目標設定	②ルールづくり	③動機付け	④評価	⑤人の育成
A 岡山県 小学校教諭 50歳代 男性 6年生担任	笑顔 だれとでも協力し、どんなことにもあきらめずチャレンジするクラス	学級のルール、1日の流れをパターン化 当番活動	語り、学級通信	望ましい行為は即時フィードバック 学級通信や成長ノートで共有	コーチングを利用 子どもたちにやる・やらないの選択をさせる 振り返りノート
B 奈良県 小学校教諭 50歳代 男性 4年生担任	いじめのない・楽しい・元気・挑戦・礼儀正しい・明るい・勇気・ケンカをしない・よく聞く・給食完食・笑顔いっぱい・仲良い・失敗→成功のクラス	学級のルール、1日の流れをパターン化	語り・学級通信、ミニネタ授業	望ましい行為は写真にとり、教室に掲示。 ルール違反の際、厳しく注意はするが、指導の深追いはせず。	コーチングを利用 指導の際、一人一人に、起立させて、意見を述べさせる。自主的な係活動 メモノート
C 大阪府 小学校教諭 30歳代 女性 6年生担任	それぞれの良さを活かして、みんなで伸びていこう。みんながキラキラに輝ける。	学級のルール、1日の流れをパターン化 当番活動 聞き方 話し方のルール	学級通信、語り	望ましい行為は学級通信にてシェア。 ルール違反の際、厳しく注意をする。発達に課題を有する子どもには指導の深追いをしない。	コーチングを利用 手抜きを防ぐため、役割分担をさせる 振り返りノート 自主的な係活動『学び合い』クラス会議
D 北海道 小学校教諭 50歳代 男性 5年生担任	5-1はステキングを大切にするクラスにしよう。	学級のルール、1日の流れをパターン化 当番活動	語り、学級通信、振り返りノート、絵本	望ましい行為は学級通信にてシェア。 ルール違反の際、厳しく注意をする。発達に課題を有する子どもには指導の深追いをしない。	コーチングを利用 『学び合い』、ペアトークの際の手抜きを防ぐため、役割分担をさせる 振り返りノート サークルトーク ハッピーレター 自主的な係活動
E 大阪市 小学校教諭 30歳代 男性 5年生担任	みんながハッピーになる。	学級のルール、1日の流れをパターン化 当番活動	語り、学級通信、ミニネタ授業	望ましい行為は学級通信にてシェア。 ルール違反の際、厳しく注意をする。発達に課題を有する子どもには指導の深追いをしない。	コーチングを利用 『学び合い』、ペアトークの際の手抜きを防ぐため、活動後、ランダムに子どもを指名 振り返りノート『学び合い』

E氏の独特の語り口調に子どもたちの顔つきが一瞬で変わる。また、手抜きを防ぐために、全員参加を促すようにしていた。一方で、無理をしなくてもいいんだといったことも子どもたちに伝えていた。

#### 4. 考察

それぞれの教師の事例のまとめを整理したものが表1である。

本調査の結果、全ての教員において、手法は違えど、マネージャーに必要な5つの基本的能力としての要素を踏まえていた。

##### ①目標設定

調査した各教師の聞き取りから、それぞれに明確な教育理念を持って、その教育理念に基づいた教育活動を行っていた。そしてその教育理念と子どもたち自身で考えた理想のクラスとのすり合わせをおこない、学級ごとに目標が設定されていた。

##### ②ルールづくり

それぞれの学級において、明確なルールが敷かれていた。しかし、学級ごとにルールを掲示物等で周知させている学級もあれば、すでに子どもたちの中でルールが内在化されている学級もあった。これは参観した時期、担任教師が持ち上がりなのかどうかによつての差異によって生じたと考えられるが、この部分に関してはさらに調査を進めていく必要がある。

##### ③動機付け

各教師は、子どもたちに何か行動をさせる時に、その行動の意義や価値付けについての語りをおこなっていた。その際、語りの方法は各教師によって様々だった。さらに、教師が考える望ましい行為をした子どもが出てきたら、学級通信などで、その行為を学級の子どもたち全員にシェアをし、行為をおこなった子どもの更なるモチベーションアップにつなげていた。

##### ④評価

教師や子どもたちにとって望ましい行為があった際には、フィードバックを必ずおこなっていた。

さらに、そういった行為を学級通信や掲示物等で学級全体の子どもたちにシェアを行っていた。

また、ルールを破った子どもたちに対しては、きちんと指導を入れるが、発達に課題を有する子どもや生徒指導上留意が必要な子どもに対しては、指導の深追いをしないことが多かった。

##### ⑤人の育成

観察に行った全員の教師が、指導を行う際にコーチングを用いて、子どもたちに気づかせるような指導を行っていた。

次に、多くの教師が振り返りノートを書かせることで、子どもたちにPDCAサイクルを意識させて

いた。この振り返りノートは、振り返りノートの中身を読み聞かせたり、学級通信で、教師や子どもたちにとって望ましい行為を学級全体に共有させることにも活用されていた。中には、メモノートとして、子どものいいところ、教師の語ったこと、日々の生活で気が付いたことなどについて、徹底的にメモをとらせている教師もいた。

また、この人の育成においては、教師主導で進められているトップダウン方式と、子どもたち主体で進められているボトムアップ方式の2パターンが見られた。

今回の調査の結果から、学級づくりに定評があると仮定した教師たちには、共通項が見出された。しかし、一方で課題も多く見られた。

まず、調査対象を教師側の視点のみから選んでしまったことだ。つまり、子どもたちにとって本当に有益な学級経営を行なっているかの視点が薄い。このことから、本調査の精度をより向上させて行くために、例えばQU調査などで、満足型学級を作り出している教師の指導技術に共通項が見出されるかを調査して行く必要があると考えられる。

また、現在、トップダウン型の教師に1年間取材をおこなっており、時間的経過で検討をする、縦断的研究も並行しておこなっている。次年度、さらにもう1人、ボトムアップ型の教師の縦断的研究を行う予定で、2人の教師の実践を比較検討することで、ルールづくりの部分の差異や、学級経営におけるトップダウン型、ボトムアップ型、それぞれのメリット、デメリットが明らかになるのではと考えている。

次年度は、こういった点も踏まえて研究を進めていきたい。

#### 参考文献

- 岡本育夫、澤田薫、浅井憲一、田畑吉三、花畑一吉、渡信雄、市橋真奈美（2007）義務教育諸学校における「初任者」の指導力向上に関する研究  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~kenshusho/04kiyou/118pdf/118-1.pdf#search=%27>  
 （参照日2017.11.02）
- 文部科学省（2015）中央教育審議会“これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm)  
 （参照日2017.11.02）
- 文部科学省（2005）中央教育審議会“義務教育特別部会における審議経過報告、教師に対する揺るぎない信頼を確立する－教師の質の向上－”

- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345905.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345905.htm)  
(参照日 2017.11.02)
- 河村茂雄 (2012) 学級集団づくりのゼロ段階. 図書文化
- 赤坂真二 (2013) スペシャリスト直伝! 学級を最高のチームにする極意. 明治図書
- 赤坂真二 (2017) 赤坂真二直伝! 教師のリーダーシップ (11) 主体的・対話的で深い学びを実体化するもの  
<https://www.meijitosh.co.jp/eduzine/akasaka2/?id=20170221> (参照日 2017.11.10)
- 三崎隆著 (2010) 「学び合い」入門—これで、分からない子が誰もいなくなる! 大学教育出版野中
- 信行 (2010) 「学級づくり」と「授業づくり」が学級経営の両輪である (参照日 2017.11.10)  
<http://nonobu.way-nifty.com/blog/2010/07/post-0a16.html>
- 赤坂真二 (2014) 赤坂版「クラス会議」完全マニュアル 人とつながって生きる子どもを育てる. ほんの森出版
- ピーター・F・ドラッカー、上田 惇生 (2001) マネジメント [エッセンシャル版] - 基本と原則. ダイヤモンド社
- 青木満 (2011) 「 $I = f(SIN)$ 」の法則 ～主体性を引き出すには～  
<https://jinjibu.jp/spcl/lts/cl/detl/435>  
(参照日 2017.11.15)